



萍日記



序日記

序序乃益友を尋ふはなり
おあはれ風ふ心動て松島
乃こひ志きり来も月三
有ゆること日恒ふこ戸
をさぬらるるふ引控身も
風雲の小笠よ任せく子守の村
をかりそ然る実るも是ハ心
有るき限を被是出合の信を

かては送分

玄蚌

玄備乃國を忠るる也

追いつくも亦しぬき物をまのり

人の花さくもつふ日多きあふりり

尾道

虎道

常の風はあふりしあゆみ無り

福山

風絮

晴日れをつくを純粋なるもの

浴蘭

其れ水さくは雨若流きもり

黛雨

積草や朝と暮の四の葉雑炊

斗外

落椿とくはつもてもおろあり

古音

播磨の國ふあり

ぬきいられそそふさよはつる

玄蛙

降出りしそふくまの小雨水

高砂

布舟

かろくはひよ軒をりつれつ花茎

赤石

蝸國

さつはいて身をそほしりり春の鶴

魚崎

九花

夕風やそよ吹きて人帰る

兵庫

桐栖

人よみそふさくはつるはつるの
おぼろけしきもつるはつるはつるの
昇ていもつるはつるはつるの

啼きよの松よひまなた起卵肉也

玄蛙

苔のそよふもひさくはつるはつる

奇洞

夏に來はしむるの日の月

未粘

あつかなふのこゝろはさるる

方水

ひびかりしるるふりては給ふ那

霞蝶

初明の車の音も四月か那

井眉

蛙豊の東りを送りし

洛

石山や露も常のほにをさる

玉屑

夏や来次そりしるるのあはしが

玄蛙

遊をよ道遠しと

を江路の氷のあはるる四月外

月く扶ふ世をわしはしや物もは

五来

旅衣しそ紀根の昔蒲原よ

日記をこうとぬるん

朝ふく世を雲をさるるく侍持の山

玄蛙

舟のそや浪うくあふて蝸牛

際水

羽風の付てまらるやはくは舞奏

不卜

月ふさりるやうよまたりるの虫

女
久に

夕まや次廣城をてわくも紙見

女
とこと

萍の上まもあしと夕アア那

菊石

合点して居てもけしは夕か

買山

苔の花いつてきのふいあうさうし

呂乙

菓子も亦うくれをれ名ありり空

推已

夏の月ねより出ぬおのるあぬ

椿堂

追うけておし投ぬも扇うす申

亀石

六月と何もあはれもせさうりあう

丘高

あま月影をれ旭日おんと見
の浦浪よはあしと志のあうり
藻屑の上へ座しうり

うたうぬ心の先や婦一の山

玄蛙

すつき危よまうり

日乃内無う夏の陰うすきあう

玄蛙

をてよさひしき瓜乃花落

不ト

湖の魚も戸口へ来て来て

小箱くよこのをさあふ

蛙

菊のよき中うらうらして居る肉の終

り燈と母すい糸むしの中

長刀夏井おろろる形をわらわけて

さし切は後乃きつまやう

鶺鴒う物うさうひの端よきうら

被おしるる雪終山里

二人して酒酒を備へる竈の上

摺柄名漱いづ減くやさら

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

嵐も去らさぬかき終初は道

市衣をもんをぬ首の毛ふり

とくくも顔の赤くお打濡く

関伽汲み中終鬼くても家

松の突うつくつも生る花の蔭

存るのそしるるま乃山寄

いづう美濃尾張の境も越へ
てもあひ命をさくき苦うつと
いづうつりををさるる

ト

ト

ト

ト

ト

ト

花のさく物さへあつたはる

玄蛙

越乃任の武蔵の國(り)御せり
ろふ木更の海の旅まつては
せし我のけれは又角とて

別とは六月言へしは訪の海

玄蛙

湖ののちりたる首の鹿よ
酒りく

了れやあまのこよは明あき

あまのこよは明あき

素壁

故きりやれはけは蝶の出るは

正阿

未ぬまは是別もまきこ苗の形

其齡

裕着て扱出而もふり者利

松本

仙市

六月や海乃上もて帰ひたり

可考

白了の鼻をくはは牡丹外

微席

赤宿の月もわたり釣志の娘

オミ

纒貢

姉妹の産室よれは

あつたはる物さへあつたはる

玄蛙

吾光さほて右の使もつて双蛇
のさくは又通乃とて

何れもをよみよきうそで秋乃多

雲峯

すじきの月秋ふりりり木と本

露磨

伊予の山の林をよみ

夏の日や木枯るよるは〜る

玄蛙

今秋人々ともさうり合ひ
て本母も近きつくりまう漕
のち〜よ

秋風のささる木もふ〜隅田川

玄蛙

屋敷の木の葉や秋の意

護物

やう〜の秋とふ〜けり芦の意

双湖

ふもろうも秋を産むりり

コクラ木父

叶の故のちま〜とまの木槿が

翠嵐

小口つ〜もふとふと秋の蟻

可磨

もふ〜と〜時ま〜とふり〜ら

一蕙

麻〜鳥の並ひ〜寂〜谷の意

秋守

ふん〜と〜とさめちり木槿が

道彦

深川の芭蕉菴ふ〜と〜

名月をさうらうよ尾の曲突る蛙
 名月や晴ての後の葉らこい色
 名月やあ〜といふれぬ蛇乃足
 名月や汐よ〜〜〜〜〜
 名月や〜も多〜く〜
 名月や〜も多〜く〜

随筆の果実を誇る

花すき人集てい世の〜をいふ
 鶯ふあけぬ月のおもふ
 秋や葉は屋の白をあらうと
 隣の柳ふまめくかよ
 大新屑よ火の流くおてのおぼ
 簾をよとぬ〜
 花門よ赤うれ髪をさ〜のそ記
 狐のおはる毎の〜

玄蛙

牛心

寥松

荷笠

方壺

完来

随筆

成義

玄蛙

漸江

羨

蛙

江

羨

蛙

材櫃をもちけい夏も暮るふりり 漸

おろろふや流る夜ををそめ 美

きのおれをもの松の汐ん坂 蛙

袋の糸流るあふるさる 江

こひまれば誰のやうふる草を 美

山を流るをまのそれむけ 蛙

傘ふやうせたまへる中月 江

講の証うつすきやうのや 美

むのさく木ふ汐風のおらて 蛙

舟の流るもたふら次昔畑 江

二
蝶も地宿ふあまをうけりり 葛三

船の流るの下る物音 蛙

河ふら茶釜も解るに寐て起て 三

やうてをそまると乾くたけな 蛙

偽の世よ兔も祢もさる 三

おろろ福くらあまをさる 蛙

武隈の松と姉蓮名見ふしや

之

弘道ふ曉乃 雪

蛙

病て居る鶴の羽もも秋に

之

ぢりもいらこも焚火物ふ来

蛙

る羽のちまを在取と中魚し

之

堂をく 鶴のハ啼くぬ松虫

蛙

檀の葉はれぬうきを返振る中

之

勢玉此堂のらゆきさ(なき)

蛙

ウ

雨ををあひてハ澄る砥すあ

之

草る女をさき糸込の一日

蛙

花を纏し 彼の破れもつるを

之

榎乃木志るよ夏むと春

蛙

ふや桐のつ葉もかきしき

袁丁

稲居きハ端の青きく玉糸

漸江

夕暮るまの敷ふくはうしか

一瓢

さうらちきつと候て人を待

梅寿

塩の山はー出陣磯赤とやゆらと名も
も似す海なき國より白川に舟を
去えはあつーいもかよ於不え守といひ
て吾らつーをれー人もあつーとそは
まは実境よむうと候ておろしとる里
ふいひ出むるはたふ方おぼろしく

居るかゝ名はをまふたをいしとをい
ふいひと海しをわさたおれしそ地をふ
そ風をふ向ひておのつう心よ勤き出
とれい糸と情と二つあかゝるものむ
ちんも旅よ瘦と抖擞よはしーふれ
りのもいふまじうとああかりお花の玄
蛙夫人をさく江戸よ控ふるやう千余日
祝月のはらちをぬるおのふもいし

十一
那う南をさへゆくふかめ流るゝて風情
あはたまりしせし是よりかくの方都
多きを聖田乃玉川といさあひま珠形乃
流る竹藪をぬりし末流松尾流乃流
のかうをふかめ流おのふを朽せぬ
流をわひはひよ松島よ玉置て家園
第一流政系を懐めて風情ははら
わこびはらよさむとて末流う筆をか

ふけ西りう杖をふめり曳てすてふ
一歩は始むわき流の末すてれり
おており人事りりお人は東よ西の國
くをえらるひと又東の方をきこらむ
と流骨中山よりふ流るるり画うもらも
の粉本をたくとるふひくく句を
ゆるふりりり心へ怪ととり出せば
こころをふさるいそいしてほしく妙

よむつむんは是も年のつ支とふ里
乃送旅とふれふも終ふまを終り
うよ今陸奥乃れくゆくきまよくと
えまはのふに化このむまよあ万
終るものゆも是を長櫃十条合
ふもうち入くはふとせて阿もあむ
日わもあこけ野よをうまう待むと
ふもふまうく胡平物よを之終る終

るまてそふとむのそみくま門

陸奥集英

船渡野々系を思ふ

のうくとるる終運入まきか
玄蛙

秋の松いつて物心ふまうひう水
葛羅

白川よそ

実の秋をよこも来たる秋の葉
玄蛙

了をよの宿の釣魚嘆よなり 東郷

あたらしくも味もふきの流く秋の雨 春守

胡蝶や木槭の舞へ結塔やうふ 道守

秋もことしも嵐ふらつら花 雨考

石の音や啼よ来て居る秋の蝶 白臺

衣付はくもき拍あらずを念ふ外 秋夫

秋雨や淫ふらるるるきり物 冥々

まの虫の啼よふ百はす身はうら 与人

東方中ねの雲をねて笠よま
乃里ふらるる

層雲を脊中に月の抱えりけ 玄姓

古口は何子里とも覚え承なりき
隈くを越えくつる乃れはひも陸
奥乃れ地電乃浦より漕つてりて
ふらひの湯もをきまふふら

つゝ雪のさひを啼く扱乃鹿 玄姓

月涼くくの松島(舟中)人 竹葉

けりハ扇屋といつるう浮はちく
るらるるを赤國人のあひりきよ
ふらふは

仙臺の杖を留るは

多し麻ぬ杖とふかりりり苔の菴

玄蛙

余り志こしく袖よき月

巢居

樽かけふ古江の秋のりかてふ

百非

二年こしくぬと志ける藤井

蛙

野雨のかぶ大串の浦中して

居

すくぬぬるをきく旅を

非

佐川田う一つ杖をま祢るく

蛙

ウ

料程の間より婦も杖のさほ

居

柏ちと家ふささる物いふく

非

五神よ足くぬ地子ふかまる

蛙

手分のそくつひふまこは杖のさ

互

在屋乃内をい川も急もつ

非

糸多掛乃いらにあらるるるる

居

蟻ふりたれ尾のさほら

苔

え真寺の塚を一日脊うして

蛙

二
雲さる詠のぬきき 雲のきふ
の月も花乃ひまふりらん
塘そこさあふもさるる
人衣のそま掃よけかもろふ
耳ふくくとさそ名ふは
牝の戸洗鍋を瓶よぬを
枝うく枝の吻あく
ひとくとさ色の藤汗あひ

居 非 蛙 花 非 花 蛙 居

十
葉おきあせく山をそやく
笠く雨珠人のさしう雨と
たつ弓結ひあふ洗ふ櫛乃齒
七夕の月いほ入るかりたり
すきさう花もいけり
手勢乃内さひはく鏡を
傘のはくく目結さるる
春たうれと錯磨のふら

居 非 蛙 花 非 花 蛙 居

流いりるるも二日おこしは

源山を新よきちうく晴ふらう

昔もや昔も又細乃ういよれ

ひよき花と世話やく西白

千歳よよこに夜おほく

石 珠 塔 花 珠

ぬきあますきと来ぬまの

雄淵

名もあふぬまう出て来て

百珠

ゆきくと掘りきく十日

巢居

すきか切きて寂しや秋の山

り御 旦々

うけのちる春山あしや秋の月

白石 乙二

神や内のもめはなまを帰し
あはの園よりそまはさるる
のあまこまつひい中ま
のまより園の戸は風はをい
ひ越せし物くま

何喰や時よといある鳥の

五鹿

是秋候て流るもまは流る

左玉

福んころり不怪る家解の袋也 後川

お秋よ袂の冷不自扱の那 秋芝

朝魚や赤まを危よ入るぬりの 最中

姥崎乃扱海く啼て紀川り 鳳山

初秋の山を舂よん移るる菊 南推

あゝ蓑をかきて膝ふるふりその川 文衣

左秋の別そめもり葉の二をふ 蘭二

とつゝめておまもまといは女路忌 常曙

何そ降夜ふくぬうて結川 朝尾

赤あ乃生よよ朱やその川 菊隠

一村を帯くふせまた遊ぶの物 千之

多くと麻て門の枝よ移乃手物 逸史

いふ毒やや有とくせし一處 尚山

吞水と前の川あり啼一語 宇柏

志くそあや山の葉かして人のあ 露臺

志くそあやと手綱くこころ扱ぬが 梅子

女

女

女

吞みと汲ち次その情ももたふ 雨砌

白きく結ぶるハ風もたふかりり 素圭

片隅よ寄懸きと足揺るすきか 松宇

子縮の種を踏ちじり力雑雀 青松

川よ流ふてのおまはは野菊斗く 江左

山まや窓よふくして秋の雨 敏彦

浪越えく入江乃、鶴ももふり力 古江

十ふ小桔枝ひくまてはほき 梅俤

むく来りて実と来り秋のそふり 林舎

在江戸

古江の書院のころの時

親や子結ぶるもやなかり秋の風、 蘭町

けりをきかてんせしむは

己もほぬ

中時庵の末がをせしむ秋あは
のこ時といひしきまを流り
今ハ松しまぬこま

返流ふるも雲はくもさあむ中 道彦

金令

郊外に杖を曳る人

福か道しき木の数や帰し花 巢兆

ふふゆる尾るふそても枯るり 胡準

小春風あふもきのをこひり 春蟻

薦僧の乃あけりせ大根引 ヲスリ 李臺

本母寺乃枝咲きりり初る 玄蛙

莊嚴院の志之れ書い

今更昔といはめてたし百 無説

釜かけく志之れをこそいなる 白養

つひすたしくお貞いぬまふおの柴 九秋

鎌倉の覧古

えてなまはそ下するあや料のあ 玄蛙

江乃島

木かひりやまらけま(以も)ふ

野をほふ枝を常るものなり

旅終目も野乃終り似たり

風の吹くをぬもよて椿さく 葛三

笑ふふのやまにけむりの古成り

首玖

箱根山を越る

しるるや晴るるや山峯の残りり

玄蛙

よし系乃路ふとまのま

志のく免のふ二を眺る

平賀月六日の目なり

きくひたのまやまの玉の山かつ

厚氷ありし時まの形山

府中
菅雅

八橋の甲よりしてまを系る人

の系志を訪入塵虫結核
亦新朝待飛禽墮土化采
冬受飢飢亂謾とちく一室の
系を志めりり作机とそ
とん石炉と松風をゆて
候や、時うはた又材雲山の
内夕ア時中つよこ一系まは
扱乃物落りも落るも林
あふつおをかかりてんやなと
きりくよそ林いつらと宿と
定めふりまはまか乃たわそか
うとをまのこ

三寸は橋杭あつむ西相おる

玄蛙

しるるやいふまのせ工も落る人

卓池

人間のうゝい時をりをさつぬ里
秋奉
路の二味をあらりむらりその内
女
幸
山さびしくふれは有さし時雨外
岱呂

枇杷園真行

身ははむほや合衣乃おほし山
士朗
きのふ若ふもふの紅袴
玄蛙
み牡丹おふ瘦て花さきて
竹有

湯門の道はさこころよ来
岳輅
み桶の底切はもる月かけよ
陸
相まふのちアと心残る螢火
朗
粟稗もたつに出るるとか秋道
輅
候はは浪の鳴るれも流し
有
みつもの候よ志く候のんをめて
朗
二つもふれえつ乃 益
蛙
とらうけて了る素て某新のト
有

改を吐きおきのみりし啼
 鳥を照ふ有よ足駄をおあり
 かきつけたるきに乞ふらして
 芳来く小町うゑも唐もあり
 うけいつこふ山吹のうけ
 さつ花よりちほもる細流
 さいふ乃妻を唐重のり
 後をちのおうり来一雲の雲

有 哇 朗 有 転 朗 哇 転

眼はひびり味よあるあり
 山つあふこいそくはむく
 枝のむしをち株のこむ
 婦ついで心のあるこち
 古き場うかむ世話やいてき
 連発の花のちくはく名くれ
 祇人の候も赤くひね持ち
 首と申よ起人う眼をすりく

味 哇 朗 有 転 朗 哇 転

有明月を毎てい志くも
 大釜結上らるるうららるる
 碓のきしれそ喰ふ草むし
 檢校の杖ふりするは路しま
 朝日の前を歩けをさめ
 水田の畦結よつつけもせぬ
 有 蛙 阴 有 輪 阴 有 輪

酒よ奢乃はきくそ海雨

格

竹庵のききも一記

命ありとさくく雪の八重葎
 冬に結梅をもちひよ人々来
 けしうら路ようそそ初時雨
 手は日やちきいそるは戸は
 手いとも重く月の漏る戸は

梅道
 朱月
 永秋
 亀六
 壺屋

初雪乃すめ神餅をよ海より
素剛
かかきしや糧をのちふまむ
元美
人きてふくふ遠道膝かくら
金谷

冬川のももたハ

野乃ほく中(出)りかいはり
野乗
多敷やとえこ中(た)る鶴七羽
對我
さく汐をぬふあしらふ海嵐が
鳥旭
日(山)隠れしをふ松(嶺)あり
竹思

ふもく松糸(は)と藤せぬ月影
其幽

冬川のももたハ

あふくしききき(は)枯尾花
五雄
あふくしや藪のよき寺乃棟
松菴
あふくしと雉子(は)あふくし居る松葉
士龍
あふくし落葉(は)あふくし木(は)あふくし
呼紋
あふくし世(は)あふくし枯葉(は)あふくし虫(は)売
謙高
あふくし花(は)あふくし都村(は)あふくし日(は)あふくし
斗石

旅のあはれ

唐崎よ融い木くもて落葉ふれ

二峯

旅人の股引ふし祝しふれ

大巢

空の月影たもと木葉の横更ふれ

岷江

空の月や小陸及乃一里半

朝雨

~~~~~ワナレのさあさあ

牡丹切くやるおもひありに花雪

月底

素より~~~~~かき息よ~~~~~花雪

田江

~~~~~花力なう~~~~~花門乃春

東陽

~~~~~ま~~~~~掃浪戸の小あが

砂鷗

大鶴菴の捺題ハ

冬籠何ゆるもあ~~~~~西をこし

岳輅

志ふれ~~~~~有きき~~~~~せまひ

武村

~~~~~雪~~~~~心乃ま~~~~~あ~~~~~ま~~~~~か

梅洲

~~~~~藤~~~~~て~~~~~父母~~~~~る~~~~~る~~~~~流~~~~~哉

秀子

~~~~~ち~~~~~し~~~~~は~~~~~ま~~~~~じ~~~~~松~~~~~の~~~~~雪

恭甫

虎の雲一時をかり人も来ん 竹有

送玄蛙道人

枇杷園の埋火の鼻突あをせたる
道人もふすてよあ藤乃園の隈
らそと次誰うれ集りて了乃とまむ
け寸杖突坂結着るを怖ましく
からりり切んとふた人もいさく下

戸の酒嫌ひなれそ飛くからよとく
石ををり結上よなく葉潭を休
筒よ巻ふり結捨けりまを海し
らよさ何たりも架人をとまりに
鐘ををり結けりまを海し
を助れまうおのいさく結まよひて
松の上をふく来乃山内は海より

柴樹士詞

婦こひあふは國の海

千鳥もてあまの水之海

鶴乃ちる海走の末よか系

鴨啼や鶴乃ちる末夜山

あやうふたををのぬい

すまきつたも田持もり

云々の山雲中の水橋
雲の橋の前よとて蛙を
とれ

玄蛙

五来

千影

亞溪

鳥頂

かまのあやあしりも

埋火や人の末ぬおも

埋火よ二麻時ふちり

高きふくまぬハ人の

系よ入る日雨の降

鴨川や海走の雲は解

空の内のかたよもつ

五来

きり

志宇

騏道

玄蛙

蒼虬

花屋を夜中へ帰るふり花
乃和切のさうりきる位のさうり
てま竹さか

志られて小汐ふぬ山の海り

と見

茶の花の咲るふする時雨か

五由

大かどはさるふ通ふや町乃上

立丁

手ふ出で能つふれ歩の日暮此

双蛇

鏡乃あうもくそつてさうり雪の虫

五調

はるさゆ物ゆりまへを時雨より

和切

象園乃改り来たりおとつ能内

玄蛙

三子つと能運旅さしゆりくも能人く西
合はらまへはれはるむむちつををと能が
もあ限華はる場をさうりさ候を
ゆつて

ふさるや船乃はらへは友さるる

霞城

松さうたる旅能お抽

奇淵

おのりやと標乃股つと梅見えそ

玄蛙

豆腐の売又を雨の降 井眉

来うし記のをしふく速き明よ 春哉

いづれも出の波にうたふとふ 蝶

替うてる替乃の宿に眼よ入る 涸

朝う生を法なく 門口 蛙

野の子ひふ菰乃中へ追放く 眉

山もようをふけく後乃空 哉

縁ま乃をよそくたれ西の末 蝶

いづれもを泊賣りきく 涸

と々肉をわくく心よ糸そ免 蛙

あうさ替茶を者乃のむ秋空 眉

いづれにも港のさしふをかりて 哉

風はよこを留糸紀乃川 蝶

橋を結まうけむよさきかき 涸

も替ふんぬのひ川をさるる 蛙

二 市新供う出ると家相ふふかき 眉

尾うららかに替る魚丸
試み格乃かきむらぬり也
五々留乃青藤よそくふ
折くよ眼に紅の風うふき
相模の沖を渡るふかり里
俗を結ぶる水すえぬる内之
布目凡よ藍乃香うそふ
長柄結玉^カ魚をうさん^ニ切^シ

淵 蝶 哉 眉 蛙 淵 蝶 哉

ニウ
おを満るるお水信りか
内は^ニ記^カ秋を因念ふももさく
ふくさかてくむらみ^ニ鴨の羽
ふそと^ニ紙^カを雲^カと^ニり^カら^ニひ
堀り結ぶるも一方も西ふり
あたしうたかして^ニ鳥^カを^ニ移^カを^ニち^カに
日そらまきし^ニ又^カ格^カつけ^カる^ニ也
格^カした花^カを^ニう^カら^ニ格^カ了^カ無^カき^カ

哉 眉 蝶 淵 蝶 哉 眉 蛙

神乃おもとねむあたりの 華

朱の津乃おとりの思ふま

いさく

ふん

子梅やまはるるをよめる 月居

とねる小姫ともねるまはる 蜂友

那とまきはしゝかりる海を 魚眼

早と下くたり 啼ちとり 蓬宇

あま月降るるよとたりかりり 天馬

鶴がかりねるるたり 雲のあ 三津人

はれ園やまねおむ霜乃と 去齋

降るるやとるるは二と月 吾雀

おとるる産む押のたり 一翁

枯くく若く風折あつとり 米彦

神枯きくはねるる別もふ記 後駕

物くは火桶く出次神家哉 左衛

霜乃降るるいさくたりいさく 可省

カキ

る啼や海日ささるるまきり 二有

人形まぬ時ふら霜乃ちまきり 一峯

物わとれしるる朝やまきの雨 非鉄

竹まきしるるもまきり一日の雨 凡十

冬枯やまきり風那まきの古き振 魯隱

風乃振ふまきりかきまきの那 蛾有

停那のまきり乃まきりまきり 田鶴

うたてまきり飯煮まきの有まきり 萍之

お水りを麻もまきりまきり 女 遅柳

おまきりまきりまきりまきり 春哉

山風をねまきりまきりまきり 福米

大かりまきりまきりまきり 凡仙

飯まきりまきりまきりまきり 和十

藤ぬまきりまきりまきりまきり 銀獅

内流や納まきりまきりまきり 杜口

一一まきりまきりまきりまきり 遅春

持よりやうのそき花のち桐よまて イタミ 李杏

とくくやね苗植くく美くし 比良

重く自然底んく美く那門の車 魚崎 石毛

正江後や松明流く鴨乃屋 丹頂

朔風の方ふ志あはしけく美く 文頂

那方やついと小鴨乃あ流く 加海花

柴山乃乃のむ流さよふ美く山 ナフ 盧峯

買乃そそまうくけり乃室が 尺艾

枯かつくまらふも人乃はき哉 山本 空阿

流きくまをくた拍なりあは月 未徹

松明振くくくけりくや屋枝山 百堂

重くよの流を流きく乃柔谷を 公坊

菊燈をよまうくく次はきくの那 升六

門乃松かの井志くくあ蛇の世を
あはあまうくかからむ
のく蛇のあまたくあ
を志くぬ旅人あ藤乃くく

橙とく月を指くく言ぬ
哉

鈴の園能あまはる
蛙

初多いさるるいさ
升六

沖乃乃出まふも風う吹
遅柳

大切ふ海苔をたうさる宿の内
二有

心いこふも何存あま
哉

鏡乃鳴相出乃山をさいし出く
桂

半月がりと船のあけおの
六

杞菊さ方を始りあたるけ
柳

小豆か煮けく总百合とる
有

候とく懐持くむ魁乃中
哉

菌のふさくふけよなるふ
桂

去冬よりらむと定うて有はし
六

嵐うけく枯ふあまのふ
柳

志記時をため結あふもさるる
有

漆のふたを戻るるをはく
哉

おのちふふふ毎日切や〜

ぬく〜たけの風あつてな

陸

大坂書林鹿島献可堂藏版目錄

七女子詩集 小本 一冊

同 掌故 三冊

同 註解 二冊

同 國字解 二冊

同 七律解 二冊

詩法授幼抄 小本 一冊

芥介集 詩總書全 一冊

詩對類語 同 全 一冊

詩家法語 熟字全 一冊

勝地百益 小本 一冊

將棊指覽抄 小本 二冊

三界一心記 小本 一冊

發蒙書東式 三冊

傷害五法 五冊

茶道七事式 二冊

町見辨疑 西川氏 五冊

同 六窓抄 三冊

同 盆石圖式 二冊

茶湯心の 二冊

農家心得章 一冊

狂歌芳分船 一冊

伊勢參宮名所志 二冊

愚問賢注 一冊

同 盆石圖式 二冊

茶湯心の 二冊

農家心得章 一冊

狂歌芳分船 一冊

同 盆石圖式 二冊

茶湯心の 二冊

農家心得章 一冊

狂歌芳分船 一冊

同 盆石圖式 二冊

茶湯心の 二冊

農家心得章 一冊

狂歌芳分船 一冊

和歌相火桶 宝島 二冊

新元法入 藍村著 一冊

名氏系表 著 二冊

同拾巻 二冊

其角雜俎 二冊

同元元集 四冊

貞徳御抄 二冊

家集 五冊

頼門日記 一冊

芭蕉及古文 二冊

休六 雅文清集 一冊

半化坊抄 二冊

棟長七幼集 一冊

月のおまの尾 著 一冊

は七のふよせて 著 一冊

...

...

...

...

...

...

...

俳諧小づち 一冊

同来り 著 一冊

同四季歌 一冊

芭蕉袖巻 一冊

同小舟 一冊

同松楓抄 一冊

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

瓢水登句集 一冊

藍村登句集 一冊

柳菴句集 一冊

西質集 一冊

俳諧分載 一冊

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

能治八重垣 小梅園水書

能治八重垣 小梅園水書
此書は八重垣の住居を記すものなり。其の住居の式を記すものなり。其の住居の式を記すものなり。

釋迦如來一代記 全八冊

釋迦如來一代記 全八冊
此書は釋迦如來の一代の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

三教經 四冊

三教經 四冊
此書は三教の經を記すものなり。其の經を記すものなり。

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊
此書は三即利益の傳を記すものなり。其の傳を記すものなり。

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

三即利益傳 五冊

批の記 爲石書 一冊

批の記 爲石書 一冊
此書は批の記を記すものなり。其の記を記すものなり。

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊
此書は國字の帖を記すものなり。其の帖を記すものなり。

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

國字帖 日書 全一冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊
此書は熱田宮の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

熱田宮 二冊

裁衣便覽 懷中折本

裁衣便覽 懷中折本
此書は裁衣の便覽を記すものなり。其の便覽を記すものなり。

東野州間書 全三冊

東野州間書 全三冊
此書は東野州間の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

茶器辨公集 全三冊

茶器辨公集 全三冊
此書は茶器の辨公集を記すものなり。其の辨公集を記すものなり。

繪本二十四孝 法橋至山画

繪本二十四孝 法橋至山画
此書は繪本の二十四孝を記すものなり。其の二十四孝を記すものなり。

同増補二十四孝 全一冊

同増補二十四孝 全一冊
此書は同増補の二十四孝を記すものなり。其の二十四孝を記すものなり。

諸國武邊嘯 全六冊

諸國武邊嘯 全六冊
此書は諸國武邊嘯の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

開卷一笑 全三冊

開卷一笑 全三冊
此書は開卷一笑の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

茶湯名物記 全三冊

茶湯名物記 全三冊
此書は茶湯の名物記を記すものなり。其の名物記を記すものなり。

俳諧浪谷風流 全三冊

俳諧浪谷風流 全三冊
此書は俳諧浪谷風流の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

全一冊

全一冊
此書は全一冊の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

俳諧初心式 全一冊

俳諧初心式 全一冊
此書は俳諧初心式の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

俳諧三都怪 全三冊

俳諧三都怪 全三冊
此書は俳諧三都怪の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

花鳥文庫 全五冊

花鳥文庫 全五冊
此書は花鳥文庫の事蹟を記すものなり。其の事蹟を記すものなり。

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

二十六款仙全冊 藤仲寺の仙の傑三十二人
画像の二つその一は仙の
ゆゑに其村の書物に伝はり

將軍家譜 全部十冊 北道春著
ひらき二画八

多の独けい 上のまじりけい
ひらき二画八
ゆゑに其村の書物に伝はり

南賣性来 長吉海堂
筆 年中かた

俳諧四季文集 井眉著
二冊
夏水菴美穂長吉の書
文と一とを以て其の序
文と一とを以て其の序

極浪花 二冊
長吉海堂著
ひらき二画八
ゆゑに其村の書物に伝はり

繪本武將勳功記 十二冊 室町殿の
六冊 法橋玉山画

折句いろは引 日乃志 日大全

同 孝女傳 六冊

折句式大全 前句三志 日画朗詠 日明題選

同 武者揃 三冊

前句袋 前句小全 前句選

同 武勇繪繼 三冊

前句大全 前句手選

古今 井眉著選 芭門といふ
あまのまじりけい
ゆゑに其村の書物に伝はり

興御書繪抄 全教冊 興御書繪抄
ひらき二画八
ゆゑに其村の書物に伝はり

盤陸禪師法語 全教冊

日 照希祿 全教冊 照希祿
ひらき二画八
ゆゑに其村の書物に伝はり

日白引 全教冊
ひらき二画八
ゆゑに其村の書物に伝はり

日 照希祿 全教冊 照希祿
ひらき二画八
ゆゑに其村の書物に伝はり

